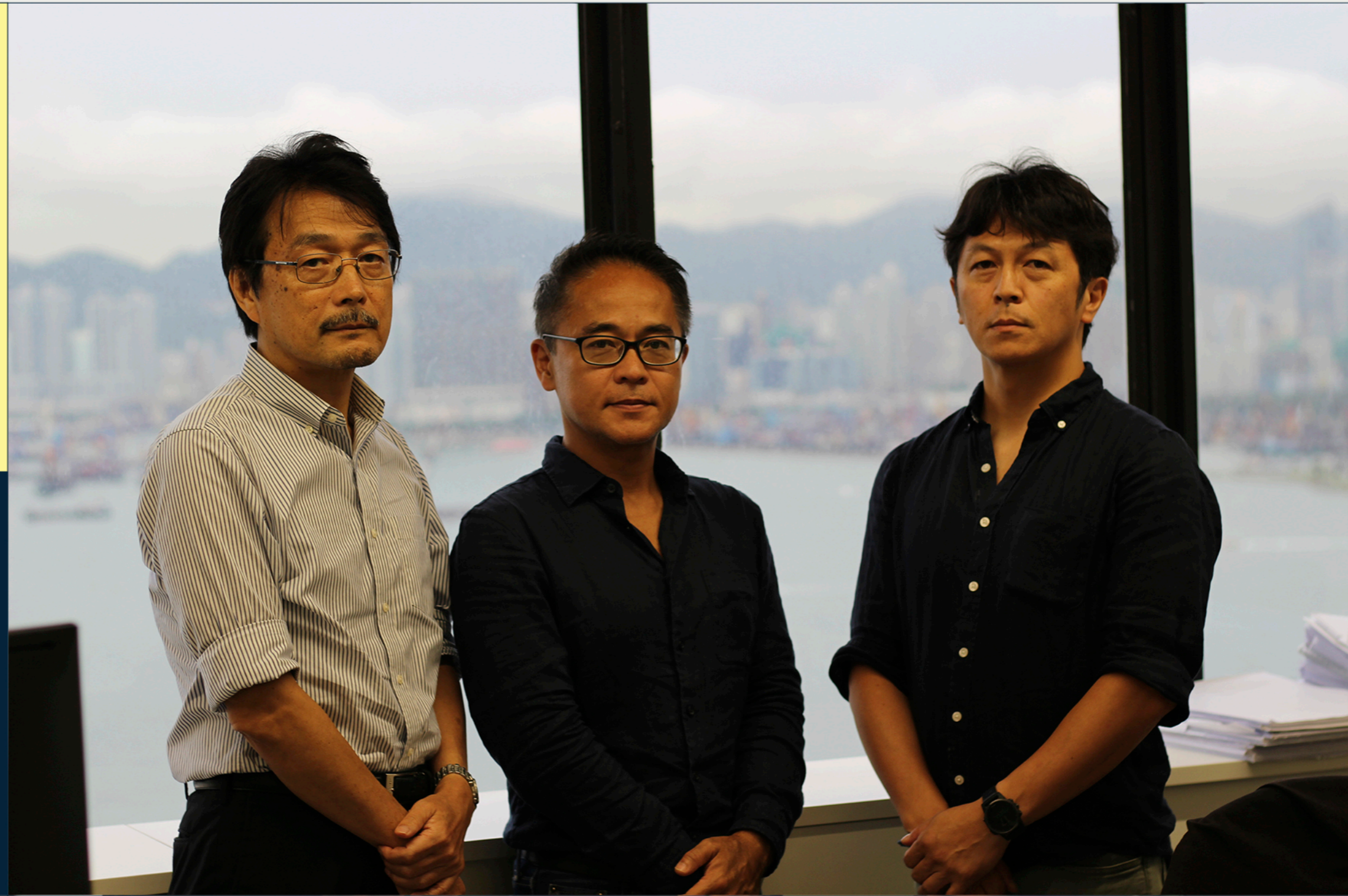


# 香港から見える ライティング・ デザインの今

植村純二さん × 盛 世匡さん × 田中康一さん  
(Lighting Workshop) (studio ARRT) (LIGHTLINKS)

金融や貿易の一大拠点であり、中国を始めアジアの玄関口として機能する香港。この都市は、トレンドやプロジェクトが集結する、デザインの拠点としての「顔」も持つ。世界中から訪れたさまざまなジャンルのデザイナーが事務所を構えており、ライティングデザイナーの植村純二さん (Lighting Workshop) と盛世匡さん (studio ARRT)、田中康一さん (LIGHTLINKS) も、その一人だ。時は異なれど同じく香港に渡った3人にインタビューし、世界を舞台にしたプロジェクトや、香港にいるからこそ感じられるライティングの今を聞いた。

文/難波工乙



世界を視野に、  
香港に拠点を構える

— まずは、香港に拠点を構えた経緯と、初めて手掛けた事例を教えてください。

**植村** 1986年に照明メーカーの社員として赴任しました。バブル崩壊に伴い、90年に撤退が決まった際に退社。そのまま残って事務所を立ち上げました。当時は、居酒屋や物販店など、日本の設計者からの依頼がほとんどでした。

**盛** 国内の照明メーカーを辞めてイギリスで建築やインテリアを学び、回りまわって2000年に香港に来ました。その頃は、バブル崩壊後の日本と比べてアジアがどんどん面白くなってきた時代でした。香港の設計事務所「CL3」を経て、「師匠」であるゲイリー・チャンが率いる「Edge design institute」に所属後、2007年に独立しています。

私自身としては、照明、建築、インテリアと職域を特定していません。CL3所属時代にライティ

ングだけを担当することもありましたが、それは事務所内に照明専門の部署がなかったからです。ただ、他のスタッフよりは得意だという理由から手掛けることは多かったように思います。フリーになってすぐに、中国のゼネコン「万科」の深圳オフィスの照明計画を含めた建築設計の依頼を受け、必要にせまって事務所を設立しました。

**田中** ロンドンの大学で照明デザインのマスターコースを修了後、国内の照明メーカーに入社。それから照明デザイン事務所を経て、イタリアの

ERCOで4年、フリーで4年程仕事をし、日本に帰国して別の照明デザイン事務所に入りました。約3年間所属する中で、2009年12月に香港を訪れ、最後の1年は日本と香港を半々という生活を送りました。

40歳を手前にして退社後、ある程度のベースもできていた香港でやっていたと決めました。もともと海外を渡り歩いていたので、日本にこだわりはなく、自然な流れでした。独立にあたっては、盛さんに相談に乗ってもらっています。最

初の仕事は、とあるディベロッパーの副会長の自邸でした。当時、盛さんのケースと同じくフリーの状態だったのですが、この依頼をきっかけとして2011年に事務所を立ち上げました。

— 初めて香港でライティングを手掛けた際、日本との相違点を感じましたか。

**植村** 照明のソフトに関して、香港の方が進んでいた印象があります。まだ香港返還前の話なのですが、香港総督府の改装にあたって仮の照明器具を設置した際、総督婦人が壁にしっかりと

と光が届いているかを確認していたことを覚えています。日本では、器具自体を見てまぶしいと言う施主がまだ多かった時代です。欧米人や欧米で教育を受けた香港人デザイナーも、ライティングに対する真っ当な評価をしていたような気がします。

**田中** 香港に来た時には、既に照明コンサルタントの仕事が確立されており、どんな小さなプロジェクトにも参画していました。日本では、まだまだだったように思います。